理想の中国語辞書を考える

——正確で効率的な探索のために——

山崎直樹

はじめに

この文章では、辞書のユーザーが必要な情報をどのように得るかという観点（だけ）から、理想の辞書の姿を考えてみたい。理想の辞書が備えているべき条件は、もちろん多方面にわたることが予想されるが、その中でも、中国語を外国語として学ぶ学習者が使う辞書は、正確で効率的な探索のためにはどうあるべきかという点に限定して、検討を進めたい。

一　検索の効率と精度について

(一)　階層構造と探索方法

(1)　辞書の記述の階層構造

ここでは、ユーザーが辞書の記述の階層構造の中をどのように探索していくか、そして、効率的な探索のためには辞書は何ができるか、を論じる。辞書において語義を記述する部分は、多義語（多機能語も含む）の場合、次のような階層構造になっていることが多い。これは、ある辞書の〝可 kě〟の項目から、品詞と語義に関する部分だけを抜き出し、表記をわかりやすく改めて示したものである。

【可】

I

A　許可や同意

B　〔助動詞〕許可や可能。…できる。…しうる。…してよい。

C　〔接頭辞〕…するだけの価値がある。

D　〔副詞〕

1　反問の語気を強める。いったい(…だろうか)。

2　推測を表す。

3　語気を強める。感情や感想を強く訴える。

4　感嘆文に用いて、語気を強める。

5　命令文などに用いて、必ず…するようにと強調する。

E　〔接続詞〕しかし。だが。

F　〔副詞〕(書面語)およそ。…ほど。…ばかり。

G　〔名詞〕姓。

II　〔動詞〕…できる。ぴったりしている。

(※実際は、個々の項目のそれぞれに相当数の例文が付与されていることに注意されたい。)

この構造は、モデル化すれば、図1のような枝分かれ図として表せる。

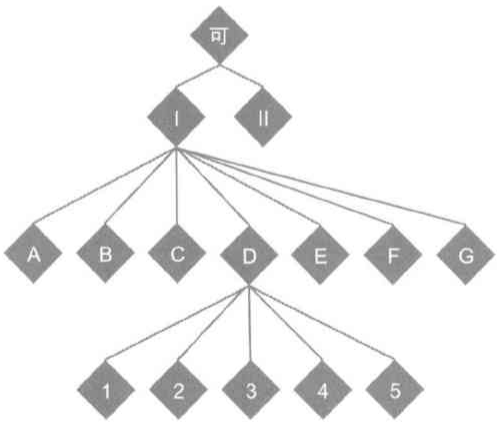


図1

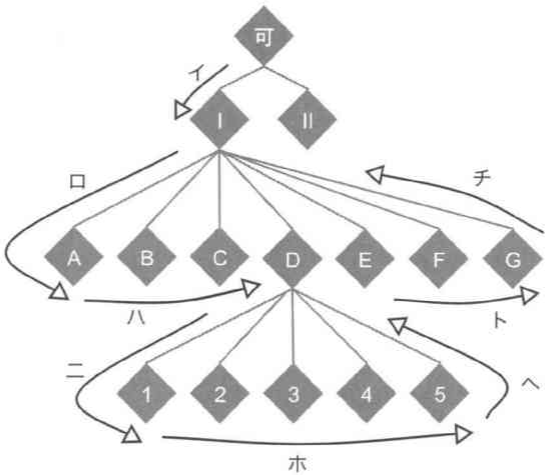
次に、この枝をどのように探索すればもっとも効率がよいかを考えてみたい（この部分は、探索アルゴリズムに詳しいかたは、読み飛ばしていただいて差し支えない）。

(2) 深さ優先探索

次の図2は「深さ優先探索」を行っている例である。この探索方法は、ある枝をもっとも深い節点まで探索し、その後、一つ上の節点まで戻り、隣接する枝の探索に取りかかるという方法である。

この探索法では、例えば、GやIIにたどりつくまでに、かなりのコストがかかることがわかる。しかし、「ベタ組み」で組まれた辞書では、目標の項目を探すためには、この方法に拠らざるを得ない。つまり、記述を頭から順番に読んでいくという一次元的な探索方法である。

機械であれば、時間さえかければ、正解まで到達できる。しかし、辞書のユーザーの場合は、もっとも妥当な記述に行きつく前に、それより前にある妥当性においては劣る記述を正解と誤認して、そこで探索をストップしてしまうことは、よく起こりうる（もっともひどい例は、妥当性の高低に関わらず、最初の項しか読まない、という利用法である）。辞書のユーザーに関して、「ある項目の記述をきちんと読まずに、それらしい記述を見つけると、その先を読むのをやめてしまう」という批判がよくなされるが、あ



探索順：イ→ロ→ハ→ニ→ホ→ヘ→ト→チ

図2

る項目の記述全体が、この「深さ優先探索」をせざるを得ないような構造になっている場合、「最後まで読む」「きちんと読む」が努力を要する作業であることがわかる。

ここでいう「ベタ組み」とは、昔の辞書によく見られるような、大項目・中項目・小項目がわかりにくいレイアウトになっている組み方のことである。

この点は近年の辞書では改善が著しい。このことは後で述べる。

(3) 理想的な探索

次の図3は理想的な探索法（正解までに最短経路をたどる探索法）を示したものである。

妥当性の低い枝は「切り落とし」て、もっとも妥当性の高い枝だけをたどっていく探索法である。これを可能にするには、どのような作業が必要か。それは、概略、以下の作業であろう。

(i) 階層構造を把握する

(ii) 最上位の節点の直下にある節点をすべてブラウズする

(iii) もっとも妥当な節点を選ぶ

(iv) (iii)で選んだ節点について、(ii)と同様の作業をする（以下、繰り返し）

(ii)の「同じ階層の節点をすべてブラウズする」という作業は、重要である。でなければ、もっとも妥当性の高い節点を選べない。

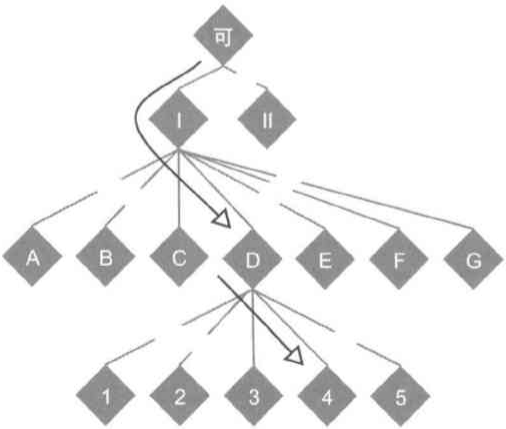


図3

(二) 階層構造の把握

(1) 階層構造を把握する手がかり

「階層構造を把握する手がかり」というと、何か、大げさに聞こえるが、実際は簡単なことである。最近出版されている辞書は、古典的なベタ組みのレイアウトは、むしろ稀で、フォントを変える（明朝⇔ゴシック）、色を変えるなどの工夫を凝らして、大項目・中項目・小項目が一目してわかるようにしている。

さらに、辞書のある項目の記述がある程度の長さを持つ場合、記述の冒頭で全体のアウトラインを示してやれば、おおよその目的は達せられる。例えば、ある中日辞典では、〝可 kě〟の項目の冒頭に、大項目（見出し語の直下の項目）の概要を列挙して（左記参照）、アウトラインを示している。

(1) 助動詞：（許容・可能）…してよろしい。…することができる。☞[1]-[1]

(2) 助動詞：…する値打ちがある。…するべきである。☞[1]-[2]

(3) 副詞：自分の強い感情を表す。☞[2]-[1]

（※以下、(4)〜(9)は、本文の筆者が省略した。）

場合によっては、ここを見ただけで、記述の本体を読まずに済ませられそうである。

なお、電子辞書の場合、詳細な説明や例文などを「折り畳む」ことにより、各項目の見出しに該当する部分だけをブラウズすることが可能である。電子辞書ならではの機能といえるが、紙の辞書の前述の工夫に比べ、さほどのアドバンテージがあるわけではない。

(2) 記述のアウトラインと意義のアウトライン

前節で述べたのは、辞書の項目の「記述のアウトライン」を示す方法についてである。

最近の潮流としては、ある語彙の「語義のアウトライン」を示す試みが注目に値する。例えば、ある英和辞典は、語義の「コア（核）」を示しているので有名だが、この辞書では、後述の(a)の語彙について、(b)のように、まず「コア」を示し、その後、(c)に見るような網羅的な解説を行う。（※この項目の場合、たまたま、「コア」は文字で示されているが、語彙によってはイメージ図で示されることもある。）

(a) study

(b) コア

勉強する。研究する→動詞・他(1)

勉強→名詞(1)

研究→名詞(2)

(c) 解説本体

動詞（他）

1　…を勉強する、学ぶ。…を研究する
2　…をよく見る、観察する。…を詳しく調べる、（注意して）読む
3　…を考慮する、配慮する

動詞（自）
勉強する。研究する

名詞
1　勉強、勉学
2　（特定分野の）研究、調査
3　研究論文、論考
4　学問、学科
5　〈…という点での〉研究に値するもの、見もの、典型
6　書斎
7　習作、スケッチ。【音楽】練習曲、エチュード

また、興味深い試みとしては、『講談社中日辞典』（第二版）が採用した「派生語ツリー」がある。ある語彙の意義を核的な意義から派生的な意義へと系統樹的な提示をしたものである。例えば、〝学 xué〟は左記のように示される。

(1) 学ぶ、習う
　(2) まねをする
　(3) 学校
　(4) 知識
　　(5) 学術、学説
　　(6) 学科

このツリーの構成が「正しい」かどうかは重要なことではない。このような形で語義のアウトラインを示せる可能性があるということが重要なのである（惜しむらくは、多義語・多機能語のすべてにこのツリーがついているわけではない、ということか）。

(3) まとめ

ここまでに見てきたように、辞書中の項目において、ある程度の長さをもつ記述については、そのアウトラインを示そうとする試みは、すでにいろいろ行われている。そして、「記述のアウトライン」だけではなく、「語義のアウトライン」を示そうとする試みが、新しい潮流として注目される。

前述の「理想的な探索法」の(i)(ii)を実現するための道具は、揃いつつあると言ってもよい。

いっぽう、(iii)（もっとも妥当な節点を選ぶ）については、どのような配慮がされているのであろうか。それを以下で概観する。

(三) 最適な枝の選択

(1) 枝を切る手がかり

前述の「理想的な探索法」で三番目のステップとして、「もっとも妥当な節点を選ぶ」つまり、いくつかある選択

の枝のうち最適な枝を選ぶ作業を挙げた。この「最適な枝を選ぶ」あるいは「不適な枝を剪る」という操作は、何を手がかりにして行えばよいのだろうか。

「辞書の記述の階層構造」で挙げた〝可kě〟の記述の例、「階層構造を把握する手がかり」で挙げた〝可kě〟の記述のアウトラインを、もう一度、ご覧いただきたい。

ここで大項目・中項目の見出しに相当するのは、以下の記述である。

(a) 品詞（〔助動詞〕〔接頭辞〕など）
(b) 訳語（「…できる」「ぴったりしている」など）
(c) 機能の説明（「反問の語気を強める」「感情や感想を強く訴える」など）
(d) (a)〜(c)の組み合わせ

これらは、辞書のユーザーが最適な枝を選ぶのに役立つだろうか。ユーザーを「ふつうの学習者」と想定し、辞書を引く目的を「わからない言葉を調べる」と仮定するのなら、「役立たない」というのが常識的な回答であろう。一般の学習者にとって、中国語の品詞の判定は難しすぎる。例えば、動詞と助動詞の違い、動詞と形容詞の違い、副詞にはどんな種類があって、それらの文法的な振る舞いがどう異なるか、接頭辞とはいったい何か……などは、一般の学習者の知識の範囲外である（また、それで問題はない）。機能の説明については、これで具体的なイメージが湧くとは思えない表現である。

一般の学習者がもっともよく手がかりにするのは、訳語であろう。並べられた訳語の中から、もっともふさわしいと思われる語を選んでいくという作業は、ごくふつうに見られる。しかし、学習者が辞書を引くのは、ふつうは「意味がわからない」ときであることを考えると、「意味がわからない語を調べるのに、意味を手がかりにする」のは、かなり危うい手段である。また、意味のわからない語が複数あったとき、可能な意味の組み合わせは、飛躍的に増加する。その中から最適な組み合わせを選ぶのは、かなり難儀な作業である。

また、英和辞典ではよく見られる記述の方法であるが、構文パターンを選択の手がかりにする方法もある。左記は、英語の動詞〝request〟の記述である。

《人などに》〈物・事〉を要請する
1 ［〜 that 節］…であることを要請する
2 ［〜 A to do］〈人〉に…するよう要請する

これはもちろん、自分が調べようと思う語彙が使用されている文を見て、構文パターンを理解できるだけのスキルがないと使えない方法である。

加えて、中国語のように、分かち書きもしなければ、語形変化もない言語では、未知の語彙が含まれる文を適切に分節することは困難であるから、パターンを見いだすこと

はさらに困難になる。

また、現代中国語の学習者にとって不利なのは、現代中国語の学校文法においては、英語のthat節や不定詞句のように、ふつうの学習者でも知っているような構文パターンの類型がさほど多くないことである。この現象の背景には、構文パターンの類型化が進んでいないことと、構文パターンを学習者に積極的に認知させる教授法が一般的でないことの二つの原因がある。

もちろん、パターンの提示がまったくないわけではない。例えば、前置詞〝连 lián〟の記述では、「〝连…都／也〟の形で」というように、呼応する語が示されていることが多い。しかし、それ以上に踏み込んだ構文パターンの提示はというと、例えば、「连 lián＋主述句の形で」という表現がなされていることが多い。このような記述（主述句）が一般の学習者にどれほどの意味を持つか、考えるべきであろう。

ここで、この点について、電子辞書に優位性があるかどうか付言しておきたい。前節で述べた「アウトラインを概観する」については、電子辞書にアドバンテージを認めるユーザーも多かろうと思われる。しかし、本節で述べた「最適な枝を選択する」に関しては、電子辞書にアドバンテージはない。電子辞書に搭載されている中日辞書は、紙の辞書をベースにしたものであるから。

この節で述べたことをまとめると、要するに「最適な枝を選択する」ことに対する既存の辞書の配慮は、まだ十分とはいえない、ということである。

(2) 枝への重み付け

前節で述べたように、枝を選択する手がかりが十分でないのなら、探索の効率のためには、枝の配置のしかたに工夫を凝らすしかない。

当たり前のことであるが、妥当な枝が探索の出発点の近くにあれば、探索にかかる時間を節約できる。また、初級の学習者にはよくあることであるが、最初のほうの枝（あるいは最初の枝）だけしか見ないユーザーもいる。このような事情を考えると、個々の枝への「重み付け」（重要な節点から優先的に配列すること）が重要になってくる。

見出し語の下の項目の配列にあたっては、さまざまな方法がある。広く採用されている「品詞順」もその一つである。この品詞による配列も、辞書編纂者が、「ユーザーにとって重要な品詞の順に並べた」と考えているのであれば、それは、ある種の「重み付け」である。ある語彙を核になる語義から派生的な語義へとネットワーク状に配列した辞書もある。『英語多義ネットワーク辞典』（大修館書店）が、その代表的なものである（すべての語彙について、このような多義ネットワークを記述した辞書は他に類

がない）。このような配列も、ある種の重み付けである。

ただ、これらは、語義理解のための重み付けであって、探索のための重み付けではないかもしれない。一般的なユーザーにとっては、核になる語義が重要な語義とは限らないからである（例えば、『英語多義ネットワーク辞典』は専門家向けの辞書であるから、編纂の意図は探索効率のためではないであろう）。

さて、探索効率のための代表的な「重み付け」の方法が、「頻度順」の配列である。これは、頻度の高い語義／機能を持つ語彙が重要であると考え、それを優先的に配置するという重み付けである。この重み付けは明らかに探索効率のためである。近年、大規模なコーパスが利用可能になるにつれて、特に英語の辞書などでは、何らかの形で「頻度」を利用するものが多い。

実際に、頻度順を謳う辞書とそうではない辞書の配列では相違があるのであろうか。英和辞典の例を見てみよう。左記の(A)は「頻度順配列」の辞書、(B)はそうではない辞書の〝study〟の記述である。

(A)

名詞

1 《…の》研究、調査
2 書斎、勉強部屋
3 勉強、学習
4 （特に特定分野の）学科、科目
5 習作、（詳細な）スケッチ、（ピアノなどの）練習曲、エチュード
6 《…の》格好の例、典型例
7 努力
8 （せりふを覚える）俳優

動詞（自）

《…に関して／人のもとで》勉強する、研究する、調査する

動詞（他）

1 〈教科など〉を勉強する、研究する
2 〈物・事〉をじっくり調べる、観察する
3 〈計画・書類・問題など〉を慎重に検討する
4 〈人・物〉をじっと見る
5 〈俳優が〉〈せりふ〉を覚える
6 〈他人のこと〉を考慮する

(B)

動詞（他）

1 …を勉強する、学ぶ。…を研究する
2 …をよく見る、観察する。…を詳しく調べる、（注意して）読む
3 …を考慮する、配慮する

動詞（自）

勉強する。研究する

名詞

1　勉強、勉学

2　（特定分野の）研究、調査

3　研究論文、論考

4　学問、学科

5　〈…という点での〉研究に値するもの、見もの、典型

6　書斎

7　習作、スケッチ。【音楽】練習曲、エチュード

明らかに優先されている語義が異なるのが、おわかりいただけると思う。

(3)　学習者に配慮した重み付け

頻度順による重み付けは、コーパスから導きだされたものである。このコーパスは、基本的には、日常的にその言語を使用している人々（大多数はネイティブスピーカー）の言語資料から構築されたものである。そのような資料による頻度と、当該の言語を第二言語として学習する者にとっての重要度とは、必ずしも一致しないかもしれないという点は、もっと考慮されてよい。

ここでいう「第二言語として学習する者にとっての重要度」は、使用頻度だけを意味しない。例えば、ある語彙の多義・多機能の中で、その言語を第二言語として学ぶ者の第一言語からの干渉を考えて、もっとも優先的に把握させるべき語義・機能、といった選択肢も考えられるはずである。

もう少し具体的に考えてみよう。

筆者は、あるとき、複数の学習者が、〝我连汉语拼音也不会念。〟という文の意味を、辞書を使いつつも把握できなかったという場面に遭遇したことがある。後で尋ねてみたところ、当該の学習者らは、皆、「～さえも」という意味の前置詞〝连 lián〟を学習したことがなかった。つまり、辞書を手がかりにしただけでは、〝连 lián〟の語義・機能のうち、前置詞「～さえも」に到達できなかったということ、言葉を換えれば、複数ある枝のうちの最適な枝を選べなかったということである。

日本で出版されている中日辞典が〝连 lián〟という語の意義・機能をどのように定義しているかを見てみよう。もちろん、各辞書によって記述は異なるが、次の四項目は必ず挙げられている。

(1)【動詞】つながる

(2)【副詞】立て続けに

(3)【前置詞（or 動詞）】…も入れて

(4)【前置詞】…さえも

配列順は、ほとんどの辞書で(1)→(4)の順である。この配

列の基準は理解しやすい。伝統的な中国語学の用語でいうところの「実詞」から同じく「虚詞」へと並べたのである。

そして、前述の〝连…也…〟の構文が把握できなかった学習者は、この辞書において、最適な枝（[(4)…さえも]）に到達できなかったのである。辞書の配列ばかりが原因とは、もちろん言い切れないが、(4)の意義がもっと前にあったら（〝连 lián〟は重要な語彙であるから、実際には、この下にさらに細分化された項目があったり、例文があったりして、記述自体が長く複雑なものになっている）、事態は変わっていたのではないか。

実は、一種類だけ、他の中日辞典と異なる配列をしている辞書がある。前述の(1)〜(4)に限っていえば、ちょうど真逆の配列になっている。次のとおり。

(4) 【前置詞】…さえも
(3) 【前置詞】…も入れて
(2) 【副詞】立て続けに
(1) 【動詞】つながる

（※(4)→(1)の順に配列されている。）

この配列には明確な意図が感じられる。日本語使用者にとって、(1)(2)の意味は字面から容易に想像できる。(3)の意味は(1)の延長線上にある。(4)がいちばん連想しにくく、また、この前置詞を使った文は、構成が複雑になる……つまり、(4)は学習者に理解のコストを多く要求する意義・機能である。

前置詞〝连 lián〟を把握できなかった前述の学習者にこの辞書を使用させていれば正解に到達できていた、と主張するのは、あまりに性急である。しかし、理解のコストをさほど要求しない意義・機能を優先的に提示し、そこで探索をやめてしまう結果になる（初級の学習者はコストの低い選択肢を選びたがる）のと、もっともコストの高い選択肢を優先的に提示して、選択の可能性を狭めていくのと、どちらが学習者にとって有益か、きちんと検証する必要があると思われる。

(4) 枝を切るのを留保せずに済む配列

もう一つ、語義の配列に関して、考えてみたいことがある。

ユーザーが最適な枝を選択するためには、その手がかりが供給されるべきであることは、既述した。そして、意味を探すために意味を手がかりにすることが危うい手段であること、構造上のパターンの提示が一つの手がかりになりうることも指摘した。

こう考えると、構造上の手がかりを持つ選択肢を優先的に検討すれば、その枝を選択するにせよ排除するにせよ、根拠をもった判断を行うことができ、それでも候補を絞る

ことができなかった場合にのみ、残った選択肢を語義からふるいにかける、という手順で探索を行うのが合理的であるように思える。簡単に言うと、「これも違う、あれも違う」と候補を消していく過程では、「違う」という根拠が明確であるほど選択が楽で、そうやって範囲を狭めたあとで難しい選択を行うほうが間違えにくいということである。

前述の〝連〟の例でいえば、まず、〝連…也…〟というパターンに当てはまるかどうかを判定し、次に、語義を検討していく、ということである。

さらに一例を挙げたい。

動詞〝爱〟は、たいていの辞書では、概略、次の語義が採録されている。

(1) ～を愛する、～をかわいがる、～を重んじる
(2) ～することを好む
(3) ～する傾向がある、よく～する (a) 他爱害病、(b) 铁爱生锈)

配列順は、おおむね、(1)>(2)>(3)の順である。(3)の中でも、(b)に挙げた用法がもっとも後に来る。もっとも派生的な用法であると考えられているからであろう。

しかし、日本語話者にとってもっとも推測しにくい用法は、(3)なかんずく(b)である。前述の言い方をすれば、(3)—(b)は、もっとも理解のコストを要求する、違和感を感じやすい表現である。この違和感は、この場合は、動詞〝爱〟がこの用法のときに選択する項の意義特徴の組み合わせにその原因がある。平たくいうと、日本語話者が、「愛する」という動詞からもっとも想像しにくい属性を持った項が、主語と目的語の位置に現れているということである。

この主語と目的語の位置に現れる項の属性も構造上の手がかりとして使い、前述の理解のコストも考慮に入れると、左記のような配列も考えられる（出現頻度から考えれば、どの語義・用法がもっとも重要かについて、別の提案も可能であるかもしれないが）。この配列は一般の辞書の配列とは真逆になることに注意されたい。

(1) [意志を持たないモノ]$_1$——[意志で制御できない現象]$_2$
　[1]は[2]しやすい。例：铁爱生锈。
(2) [ヒト]$_1$——[意志で制御できない現象]$_2$
　[1]はよく[2]する／になる。例：他爱害病。
(3) [ヒト]$_1$——[意図的にする好ましくない行為]$_2$
　[1]は[2]する悪い癖がある。例：他爱骂人。
(4) [ヒト]$_1$——[意図的にする行為]$_2$
　[1]は[2]するのが好きだ／よく[2]する。例：他爱看电影。
(5) [ヒト]$_1$——[ヒト／モノ]$_2$
　[1]は[2]を好む／重んじる／愛する。例：……

優先的に配列されている記述ほど、構造上の手がかりが明確であることにも注意されたい。

このように、構造上の手がかり（「構造」が意味するのが品詞などだけではないことに注意）を枝の選択の手がかりにし、手がかりが明確な用例ほど優先的に探索させて、語義の配列に関しては、意図的に、理解に「異化」を起こさせるようにする、という記述の方法は、試行する価値があるように思える。

㈣　まとめ

本節では、まず、多義語・多機能語の記述にあたっては、「アウトライン」を提示し、ユーザーが最適な探索を行う土台を作ってやる必要があることを述べた。この「アウトライン」は、「記述のアウトライン」が使われるのがふつうであるが、「意義のアウトライン」を用いる方法もあることを示唆した。

次に、提示されたアウトラインの中から「最適な枝」を選ぶためには、選択の手がかりが重要であることを述べ、その手がかりを一般のユーザーに理解できる形で提示することにおいては、既存の辞書は、まだ不完全であることを述べた。

最後に、重要な枝を優先的に配置する「重み付け」について述べた。頻度順配列も一種の重み付けではあるが、本稿では、別の可能性、例えば、「日本語話者の中国語学習者にとって、もっとも効果的な配列」というものがありうるのではないか、という点を検討した。

二　辞書を引くために どれだけの知識が必要か

ここで少し、ふつうの中国語学習者が辞書を引こうとするとき、どれだけの知識が必要とされるかを考えてみたい。ターゲットとなる言語形式が一つの「語」であることが確定していれば、さほどの困難はない。しかし、中国語の場合、ふつうは、先にも述べた理由から、意味不明の言語形式から「語」を切り出すこと自体がハードルの高い作業である。そのことを具体例とともに見てみたい。

例えば、〝你先喘口气儿吧！〟という文を見かけて、その意味がほとんどわからなかったとする。その後の探索の手順は次のようになると推測できる。

〝你先……吧！〟は何とか理解できる。残りの〝喘口气儿〟の意味を突き止めねばならない。

文字列の最後の〝儿〟は、〝儿化〟の標識で〝-r〟と読むのかもしれないし、〝儿童、幼儿〟などに使われる「児童」という意味での〝er〟かも知れない。前後から考えると、「児童」ではないように思われる。

〝儿化〟は、任意性の高い言語現象である。辞書には、〝儿化〟していない形式しか収録していないことも多い。そこで、これを取り除いて、〝喘口气〟を探すことにする。

〝气〟が「息」という意味で使われているとしたら、その量詞として、〝口〟が使われる可能性は高い。また、数量補語の数値が〝一〟の場合、省略されることも多い。〝口〟が量詞だとしたら、これだけで数量補語を形成していることもありうる。これは、〝喘〈動詞〉口〈数量補語〉气〈目的語〉〟という構造ではあるまいか。

であるとすれば、〝喘气〟という動詞＋目的語構造をターゲットに、辞書を引く必要がある。

……ざっと、以上の如くである。これは、最短にして最適の探索を行った例である。「最短にして最適の探索」を行うためには、いかに辞書がユーザーに知識を要求しているかが、おわかりいただけたと思う。

「理想の辞書」の条件は、さまざまであろうが、少なくとも、ユーザーに要求する知識がより少ない辞書ほど、理想の辞書に近いということはいえそうである。

三　その他、探索に関わる問題

(一)　親文字方式とローマ字順方式

中国語辞書の項目の配列方式は、大きく分けると、「親文字方式」（漢和辞典に見られる方式）とローマ字順配列方式がある。他の言語の辞書と大きく異なるのは「親文字方式」であろう。

この親文字方式の優劣（ローマ字方式との比較において）については、すでにいろいろ論じられているが、ここでは、探索の効率の見地から考えてみたい。

簡単にいうと、親文字方式は、「耳で聞いた意味のわからない表現を、辞書を使って同定する」という、辞書を使って行うもっとも重要な作業が、非常にやりにくい。一例を挙げる。

〝嗜好 shìhào〟という表現を聞いた学習者が、〝shìhào〟という音だけを頼りに、辞書を使って、この語を同定しようとしたとする。親文字配列の辞書しかもっていない場合、〝shì〟という音を持つ親文字の下に、〝shìhào〟という音を持つ二音節語があるかどうかを順番にチェックしていくことになる。だいたいの親文字方式の辞書は、親文字を画数順に並べているので、おおよそ、下例のような探索を行うことになる。〝嗜〟より画数の少ない〝shì〟は、よく

使う文字でも二十字以上あるので、かなりの作業になる。

士＞〝士 hào〟を探す
示＞〝示 hào〟を探す
氏＞〝氏 hào〟を探す
世＞〝世 hào〟を探す
仕＞〝仕 hào〟を探す　……（以下、繰り返し）

もし、この学習者が、〝shì〟の音に自信が持てなくなり、「他の声調だったかも？」「〝xì〟だったかも？」と考え始めたら、どうなるだろうか。

㈡　二種類のローマ字順配列

ローマ字配列の辞書であれば、前項で述べた問題は（だいたい）なくなる。この点を見れば、ローマ字配列の辞書のほうが優れていそうである。しかし、現在、出版されている辞書で採用されている「ローマ字」にも問題はある。

「ローマ字配列」を謳う現行の辞書は、管見の限りでは、文字単位のローマ字配列（アルファベット一字単位でのソート）を採用している。しかし、現代中国語をアルファベットで表記するための代表的な方式の一つである漢語拼音では、ローマ字一字が音素一つに対応しているわけではない。結果、左記に示すような配列になる。

民兵　mínbīng
明白　míngbai
民歌　míngē
名額　míng'é
明亮　míngliàng
命令　mìnglìng
名片　míngpiàn
命运　mìngyùn
民间　mínjiān

この配列はどう考えても、現代中国語に適した配列とはいえない。〝min〟という音節で始まる語と〝ming〟という音節で始まる語が混在しているからである。

音節を一つのブロックとして固定した配列を採用すれば（現代中国語では、一つの音節の内部構造が変化することは少ないので、これで問題はない）、もっと良い配列になる。また、現代中国語は、音訳語を除けば、一音節が一形態素となっていることが多いので、中国語の構造を理解するのにもつごうが良い。次に例示するような配列方式が一般的にならないのは、はなはだ不思議である。

民兵　mín bīng
民歌　mín gē
民间　mín jiān
明白　míng bai
名额　míng é
明亮　míng liàng

名片　míng piàn
命令　mìng lìng
命运　mìng yùn

結

日本で出版されている「中国語−日本語辞典」の記述内容は、他の国や地域の「中国語−××語辞典」に比べ、質・量とも抜きん出ている。しかし、その優れた記述も、辞書のユーザーがその存在に気づかなければ、何の意味もない。

この文章では、辞書の記述を生かすためには正確で効率的な探索が不可欠である、との観点から、記述すべき項目をどのように工夫すれば（特に配列に関して）効果的かを考えた。